

西照寺々報「さいしょう」

第 3 号

1986年7月16日

発行 浄土真宗本願寺派・西照寺

高岡市吉久2丁目4-40

# 西照

## 「南無阿弥陀佛」の六文字

吉田 秀 義

第一号西照で阿弥陀の世界と仏(Buddha)について書きましたので、今回は南無の世界について述べてみましょう。

「先生、お腹が痛い、下痢もする。直ぐ痛み止めを打って。」とある日丁度在宅夜間当番をしていた当院へ、高校一年生の女生徒が母親と一緒にやって来ました。診察してみると酒くさい息をしている。「どうしたの。大分飲んだみたいね。こんな無茶なことをするからお腹が痛くなるのはあたり前だよ」と、取りあえず鎮痛剤の注射をして帰ってもらいました。後日母親と母親の姉さんが私のところへ患児のアルコール依存症を治してもらえないだろうか。嫌酒薬を下さいと相談に来ました。患児の背景にある家族は、母子家庭で両親の離婚、転居により子供の性格が変わり、母親に反抗的になり何時の間にかアルコールを飲み出し、シンナー遊びをする手のつけられない不良女子高校生になっていましたと、泣きながらの訴えです。母親の苦悩はみるに忍びず、「嫌酒薬では性格はよくなりませんよ。私は登校拒否児を専門にカウンセリングしていますから、私に少し子供さんをまかせてみませんか」と声をかけましたが、嫌酒薬を欲しいとの一点ばりで、私

の話聞き入れてくれません。夫に裏切られ頼りにした娘は問題児、もう捨身の境地に追い込まれている家庭状態でありながら、人間とはどん底に落ちてもなかなか自己の苦悩の全てをあずけて正しい指導者の指導に従うことは出来にくい生きものだということを痛感させられました。

ある日突然、病気になる救急車で運ばれ、病院へ緊急入院して生命が助かり小康状態になると、病院から出ているお薬を飲まず、こっそり漢方薬を飲んでみたり、病室を抜けだしてほかの病院へかわつてみたり、なかなか現代人は病気になるっても全てを治療者にあずける心境

に達することが、出来にくくなったのではないのでしょうか。

南無とは、自己の苦悩の全てを指導者にあずけることだとも言えます。心を一点に絞って一心不乱になることでもあります。一心岩をも通すかというたとえや、太陽の光をレンズを通して一箇所にまとめると火を発するように、ここを集中させることです。南無は、他人に物事を頼むとき「せひよろしく」のせひの心でもあります。せひには、絶対という強いひびきがあります。阿弥陀の世界に頼みをこめて一心不乱にお念仏を唱え、み仏に全てをあずけてそのお導びきに任せてこそ、信心の心が生まれるのです。すべてをあずける簡単なようになかなかむつかしい心の世界です。

赤ちゃんが母さんのオッパイを吸うことに没頭し、母親の顔をじつと見つめたりしますと、母親の方もほかのことが意識に入らなくなつて、赤ちゃんの顔しか見えなくなりオッパイをあげることに夢中になります。戦前は汽車の中、電車の中で若い母親が他人の眼を気にせず、胸をはだけて授乳している姿は、よくみられたはほえましい風景でした。現代の若い母親の乳房は子供を育てるためのものでなくなり、女性を男性にカッコよくみせるための身体の飾りと、価値感が変わってきました。自然とは不思議なもの、最近の女性は出産をしても最初から殆んど母乳が出ません。母なる大地も他人愛から自己愛へと土壌が変わりつつあり、自己主張優先の感情(自我)が家族崩壊へとつながり、仏教の因果の法則から逃れることが出来ません。

人間は一人で生きているわけではありません。多勢の人間に囲まれて生きています。いや生かされているのです。太陽や地球のすべての自然の恩恵を受けているのです。私達ももう少しお互いを信頼し、すべてお見通しの阿弥陀如来さまにすべてをあづけて迷わず、お導びきに從う境地をお念仏を通して学び、感じ、感謝して一心不乱になつて、南無阿弥陀仏と声高らかに唱え合い信心の心を深めたいものだと思念しています。

合 掌

(西照寺責任役員・吉田医院々長)

# ひかり来たりて 仏陀の出現

## (3) 安らぎに至る道を求めて

岡 西 法 英

出家の行者、みちの人(沙門)となったゴータマ・シッダールタ(後の釈尊)は、当時最大の強國マガダ國の都であった王舎城へ向かわれました。そこが当時としては新しい文化の中心地であったわけです。

釈尊は教えを求めて、まずアーラーラ・カーラーマという仙人をお訪ねになりました。この仙人は「無所有処」(我がものという執着のない無一物の境地)という禪定(心のしずまり)を体得して三百人の弟子達を導いておりました。

弟子入りした釈尊は、程なくして師のアーラーラ仙人と同じ「無所有処」の禪定を体得することができました。

しかし、「この法は厭離に赴かず、離欲に赴かず、止滅に赴かず、平安に赴かず、習に赴かず、正覚に赴かず、安らぎに赴かない。ただ無所有処を獲得し得るのみ」(中阿含経第五十六卷)と考えられた釈尊は、アーラーラ仙人のもとを去られました。

釈尊が次に訪ねられたのは、ウツダカ・ラーマブッタ仙人でした。この仙人が教えたのは「非想非非想処」(おもいがあるのでもないのでもない境地)です。この境地は有頂天とも呼ばれ、あらゆる禪定の中で最高のものとされています。

釈尊はやがてこの境地をも体得されるに至りますが、これもまた真の安らぎではないと判断して、ウツダカ仙人のもとを離れてしまわれました。

二人の仙人のもとで、最も深いとされた禪定を修得したにもかかわらず、「アーラーラの無所有処も、ウツダカの非想非非想処も、どちらも貪欲を離れ、心の寂靜と真の智慧を獲得するにも、さとりにも役立たなかつた」(中阿含経二〇四)こと

から、釈尊はマガダ國を転々として、ネーランジャラー河の畔のウルベラーの林に入り、ここで六年間にわたって激しい苦行に取り組まれることになりました。

苦行というのは、呼吸を止めたり、減食や断食をしたりして、身を責め、諸の欲望を抑えつけることですが、そればかりではなく、常に孤独であり、森の夜の暗闇の恐怖にも耐えねばなりません。

余りに激しい苦行を重ねた結果、釈尊の身は垢にまみれ、やせ衰えて骨と皮のみとなり、用便するにも倒れそうだったと経典には説かれています。しかしそれでもなお、求めるものが見い出せなかつた釈尊は、苦行はいたずらに身心を疲労、消耗させるだけだという結論に達し、遂に苦行を捨てられたのでした。

「わたしは過去の、そして未来のどの苦行者よりも、わたしの経験した行の苦しみは最高だと思っている。しかし、これ程までの苛烈な苦行をしたけれども、聖者の智見を獲得することができなかつた。そしてさとりへの道は必ず別にあるに違いないと思つた」(南伝「中部」第三十六経)

当時の実践修行の方法として一般に信ぜられ実践されていた禪定も苦行も、自らが求めている究極の安穩に至る道ではないと悟つた釈尊は、世人の通説をたよりとせず、自己自身の思索と体験によつて新たな道を見出すより外はないと考え、垢にまみれた身をネーランジャラー河で洗い、スジャーターという娘の捧げた乳糜を授けて衰えきつた体力を回復されました。

今や天地のどこにも頼るべきもの、従うべき教えを見い出せず、全くの「一人」となつた釈尊は、やがて、ネーランジャラー河を渡つて対岸の林に入り、一本のピッパラ樹(後に菩提樹、すなわちさとりへの樹と呼ばれる)の下に坐つて、命をかけての思惟を始められました。いかなることがあろうと、さとりを得るまでは、この座を立つまいと決意して。そして、激しい内面の葛藤の末、夜半を過ぎて明けの明星の輝く頃、ついに智慧の眼を開いて、無上の安楽なる「涅槃」を得、目覚めたる人、仏陀となられたのでした。二十九才で出家してから六年、三十五才の時でした。

釈尊が何をさたられたのかという問題は後にゆずつて、釈尊が万人共通の悩み、「老病死」の苦惱から出発して、菩提樹の下にさとりを開かれるまでの歩みの中に、私達は何を学ぶべきかということをまず考えてみたいものです。

年若く健やかで、満ち足りた生活のうちにあるカピラ國の太子シッダールタの「悩み」、老病死の身、老病死に苦悩しないではいられない心をもった人間であることの「悩み」から、私達は、人生が本来、如何に苦(ままならぬこと)であるかを学ぶことができます。

また太子の「出家」から、若さも、父母も、妻子も財宝も地位も家も國も、眞の宝、ついの拠りどころではないこと、老病死の身は私自身が背負わねばならず、誰にも代つてはもらえないのだということ。悩んだり苦しんだりしているのは私自身の心であつて、神でも運命でも遇然でもないことを教えられます。これらのものに執われ、縛られて眞の苦悩の解決の道を見いだせないまま空しく日を送っているのが私達ではないのかと自問しなければなりません。

この世の幸せをつかむための占いやまじない、神々への祈願や祭祀は、この世の幸せの只中に悩みを見出し、それを捨て去つたシッダールタ太子には、何の魅力もなかったに違いありません。

如何に世俗的幸福に恵まれても免れられない老病死の身であることを、悩まずにいられない自分の心の問題は、悩む自分の心をそのものを何とかしなければ解決しようがないと、数多くの宗教家達の中でも禪定(心しずめ)の専門家であつた二人の仙人を訪ねられたのでありましょう。

釈尊が学ばれた無所有処や非想非非想処と呼ばれる禪定は、もはや心の悩みなど感じない程に深い冥想であつて、最高神である梵天の世界よりもなお高い境地であるとされたものです。

これらの禪定に「無所有処」「非想非非想処」という名がつけられていることは、裏をかえせば、「これは我がもの」という所有の念、さらには「ものを想う」ことこそ、あらゆる悩みのもとであつて、これさえやめば悩みは感じないのだということを意味しています。

しかし禪定に入っている間はよいとしても、それはいわば一時的平安であつて、何時までも禪定に入つたままではいられません。生身の身体を持つて以上、禪定から立ち上がつて、食事もとらねばなりません、用便もしなければなりません。禪定から醒めてみれば「所有」「想」もなくなつてはおらず、悩みある心である

ことは少しも交つていないというわけです。一時的に悩みを忘れていただけで、悩みがなくなるわけではなかつたのです。

私達はこのことから、よく世間でいわれる「要は心の持ち方次第」という言葉は、生身を持つた人間には、實際上問題の解決に役立たないものであることを知ることができます。心を思いどおりの状態にたもち続けることはできないのは飢えや渴き、痛みを感じる肉体を持つているからです。肉体を離れて心があるわけではない以上、心の問題は単に心だけの問題ではなかつたのです。

禪定による解決は無理とみて、釈尊は次に苦行を試みられました。肉体的欲望と戦つてこれを打ち砕くためでした。しかし、如何に五欲を感じない程に身を責めても、それで心の平安は得られませんでした。

「欲さえなければ」というものではなかつたわけです。限りなく死に近い状態にまで幾度となく近づいて、あらゆる欲望と戦ひ抜かれた釈尊でしたが、ついにさとりは得られず、永久に飢えも痛みを感じない身になられたわけでもありませんでした。

欲も苦痛もなくなるのは死んだ時です。死んだことが安楽でもさとりでもないように、欲を感じず苦痛に耐えることが安楽やさとりではなかつたのです。

釈尊は既に世に知られたあらゆる実教的実践が、結局のところ老病死の苦悩の解決にはならないことを身をもつて知られたのでした。そして今や、如何なる神にも人にも教えにもよることなく、自己自身のありのままの事実立ち、自らを抛りどころとして、大いなる覚めを求めてピッバラ樹の下に思惟をこらされたのです。

(つづく)

(高岡市内島・教願寺副住職)



# 浄土真宗よろろず心得

## 葬儀

③

一、臨終から拾骨まで

(5) 出棺(出棺勸行)

もともとは故人の家の仏間などで「出棺勸行」を行い、その後葬儀場で「葬儀勸行」をそれぞれ別に行っていました。現在は寺院や家庭などで葬儀が行われています。関係上、同一場所にて「出棺勸行」「葬儀勸行」と続けて行っています。

(6) 葬儀(葬儀勸行)

浄土真宗では葬式と言ひ、告別式とは言ひません。在職壇の上段には、本尊を安置して、故人の写真や法名は下段に置きます。これは故人が今生に於ける最後の仏前のおつとめの形式をとっているものとして、正面に棺を置き、導師並びに諸僧はその背後でおつとめをする体裁のようです。

庄厳<sup>しやうげん</sup> 棺前に前卓を置きます。前卓には五具足(花瓶一對、紙華四本ずつ、香炉・ろうそく立一對、ろうそくは銀又は白)を配置し、打敷・水引(白または銀地)と供物(仏飯・小餅等)で庄厳致します。

焼香の作法 焼香の仕方はまず導師に軽く一礼をし、焼香卓の前に進み、仏前に向かい一礼をします。お香を一回つまんでそのまま香炉に入れ、合掌し、念仏を称え礼拝します。終つて仏前に一礼の後、導師に向かつて一礼し、静かに自席に戻ります。

注意

焼香の時、香をいただいたり、何回もつまんで焼香は致しません。焼香は故人にたむけるのではなく、本尊に合掌礼拝する前に自分の臭気を除くためにあります。

弔辞・弔電は勸式ではありませんから勸行次第の中には入れず、あらかじめ導師と打ち合わせましょう。

弔辞・弔電を読む時、焼香してその香煙でこれらを薫じられる例をよくみかけますが、これは焼香の意味の誤解によるものと思われまます。浄土真宗ではそのようなことは致しません。

また弔電について、進行係は「弔電披露」とはいいません。悲しみの電報は一般社会葬者に披露するものでなく、「弔電代読」というべきです。代読だから、敬称も略するのが礼儀です。

弔時・弔電の読み上げに長時間を費さないよう、数通までとし、あとはまとめて仏前に奉呈するよう心がけましょう。

(7) 火葬

火葬場(火屋)へ行つて、「火屋勸行」をつとめます。

注意

火葬許可証を持参しないと、火葬してもらえません。  
火葬場より帰つた際に、清め塩を使う習慣は根強いものがありますが、浄土真宗では行いません。清め塩は、死を穢れとみる神道より出たものとおもわれますが、浄土真宗の教えにはふさわしくない風習です。

(8) 収骨(骨拾い)

お骨を拾つて容器に納め、卓上に置く、尊前にて焼香礼拝を行います。

(9) 還骨

お骨が家に還りますと、お仏壇の前に卓を用意してその上にのせ、勸行致します。その後お骨はお仏壇の左側下の段に安置します。別に床の間に中陰壇を設ける所もありますが、中陰壇にはお骨を安置し、故人の写真を飾ります。

庄厳 前卓には三具足(お花は桜又は常緑樹、ろうそくは白又は銀、打敷・水引は白)、仏飯を供えます。(つつく)

(「浄土真宗葬儀よろろず心得」より取捨)

## 西照寺行事案内

夏季(祠堂)永代経

八月八日

速夜(午後二時)

九日

日中(午前九時)

速夜

十日

日中・速夜

布教使 海内慶静師

## 浄書の集い

隔月(二・四・六)

・八・十・十二月

二十日 午後七時半

九時

「重誓偈」「讚仏偈」の書写(写経)と法話(お経の解説)

お誘い合わせの上、

ご参詣下さいませ。